



馬 耳 東 風

1年遅れの東京 Olympic が開催された。

結果として、日本選手は目標に掲げていた金メダル30個には及ばなかったものの、メダルは金27、銀14、銅17の計58個で、金メダル数、入賞者数ともに過去最高の成績となった。多くの国民はテレビの前での観戦となったが、COVID-19で先の見えない生活を強いられている状況で、選手から勇気と感動を得たとの声も多かった。

その一方で、全人類が集う平和の祭典というべき Olympic が、国民の世論調査や COVID-19 の政府専門家会議において開催に慎重な対応を求める多くの意見がある中で、関係者の人事問題等トラブルが続き、しかもほとんど無観客という異例の形で開催されたことについて、海外の人々の目にはどのように映ったのであろうか。

最近、多くの出来事の経緯を見ていると、強く疑問に思うことがある。それはさまざまな事業の企画力の低下と責任の所在不明という2点である。通常、事業の企画

は多くの関係者の意見を参考に十分に審議を重ねて立案される。しかし、最近ではさまざまな場面において、その審議過程が不明確な場合が多いと感じている。結果としてその企画を実行する段階で大きな問題が噴出して来る。特に行政の場では国・地方を問わず国民・市民の税金を使って行われる施策については国民に対する説明責任が問われるであろう。Olympic についても、関係者は長い年月をかけて準備してきたのだから開催したいと思う気持ちは理解できるが、COVID-19 予防対策と同様に科学的な根拠よりも感情論で対応策が決められている感がある。加えて、毎年のように財政健全化の重要性を唱えている中、COVID-19 対策と Olympic 開催の経費支出も十分な政策論議を重ねて出てきた結論とは言い難いと疑問視されている。

COVID-19 感染拡大下において、さまざまな課題を抱えつつ開催されたこのたびの東京 Olympic について、十分に検証し、次回の Olympic に生かされるよう提言することもわれわれに課せられた責務である。

(青)